

【佳作】

さをり織り

吉田由紀子・東京都

午後の日差しが差し込む部屋で、知的障害のF子が一心にさをり織り機に向かっている。縦糸を足で切り替える微かなキーコという音と横糸をしっかりと押さえるトントンという音が静かな室内に響く。

F子は、私の中学校の教え子である。中学校入学時には場面緘默で慣れている家庭内では普通に話せるのに、学校では緊張して全く口をきくことができなかつた。でも根気よく付き合つていううちに段々慣れて気を許すようになり、笑顔が増え言葉でのやり取りができるようになつた。運動会で、皆の前でも代表で挨拶もできるようになり、卒業していくた。

しかし、中学校卒業後、養護学校の高等部、を経て作業所に通うようになつてまた、外では口をきかなくなつてしまつたとお母さんから伺つた。

そして、ちょっとした失敗で作業所にも行けなくなり、ここ数年は家でさをり織りの機械を買って家でさをり織りをして過ごしていたとのことであつた。

私が学校を退職後作業所を立ち上げ、そこでさをり織りを始めたことを聞きつけ、親子で見学に来た。そして、是非通わせてほしいということで、その翌日からF子はニコニコとやつて來た。まだ周りの利用者と馴染みがないためか、言葉は発しないが、毎日黙々と織り機に向い、一段ずつ丁寧に織りあげていく。

さをり織りは、本人の感性で好きな色を選び織りあげていくので、F子の作品は、柔らかい明るい作品に仕上がっていく。縦糸のうち込みもやさしいので、ふわっと柔らかい作品に仕上がる。簇通し、綜続通しもF子はできるようになり、最近では整経（縦糸作り）もできるようになり、縦糸も好みの色と風合いの糸を選び織れるようになつてきた。F子は、まだ自分からは殆ど喋らない。でも、さをり織りの温もりのある色合いは、F子の気持ちを表している。

こちらの言うことにはうなずいたりして自分の意思を表してくれるようになつた。笑顔も増えてきた。他の利用者の話を聞いてクスクス笑つている場面も見られるようになつた。さをり織りを通して自信がつき、心を開いて言葉を交わしてくれる日が必ず来るだろうと信じている。

お母さんも六十年代後半になり、ご自分の老後のこと、親亡き後のF子のことなどなど、悩みが大きかつたようである。八年も家に閉じ籠っていたF子が毎日作業所に通えるようになつたことに、ほつとし、本当に救われたと語つて下さつた。まさに、さをり織りのお

陰でF子と社会の糸が繋がったのだと感じている。

F子の織りあげたさをり織りのマフラーを首に巻いてみて、その温もりを感じながら、織物の持つ魅力と人を変えていく力の大きさに改めて気付かされた。

太古の昔から、人は布を織る技術を持ち、それに穴をあけ、貫頭衣として身にまとつてきた。織り方の基本的原理は縄文時代から殆ど変わっていない。縄文時代の人々が織物の技術を開発し、その営みをつなげ、紡織や染色技術は発展し、多様化し、機械化してきた。しかし、自らの手で紡ぎ、織りあげていくことにより、自分で作り上げたという達成感は、遠い祖先から伝えられた一番大切なものであると思う。

自ら織りあげていく喜びや感動がF子の生きる力を培っているとさえ感じる。一人でも多くの人にこの喜びと体験を伝えていきたい。今は先が見えなくとも、いずれはF子のように変わることができると信じて歩き始める人が一人でも増えてほしいと願つている。そのため、F子の作品をより多くの人々に知つてもらい、この喜びを共感してもらいたい。更に、この技術と共に、作り上げる喜びを次世代に伝えていくことが、今の私たちの役割りかもしれないと思い始めている。